

フョイエルバッハの会通信 第106号

フョイエルバッハの「食の哲学」の近年の研究について

河上睦子

フョイエルバッハの宗教批判が、宗教に対して両義的立場にたっていることは、研究上、さまざまに論議されてきたが、これは彼の人間学の問題でもあったのはいうまでもないだろう。彼の宗教に対する両義性の問題は、彼の人間観、とくに感性的・受苦的人間観の解釈と結びついているからである（受苦性：受動性⇒能動性）。だが問題は、この彼の考えが中期の思想の特色であり、後期の思想にはそれとは異なる考え、とくに中期の人間観と異なるかどうか、またどのように違うかであるだろう。

私は、後期の思想は中期の思想と少し異なると考えている。典型的なのは、宗教分析対象の変化による宗教批判哲学の内容変化や、自然主義や心身論などの補充である。こうした後期思想の特色は、彼の宗教批判および感性的人間観とどのように違うのか。エンゲルスをはじめとした従来の解釈では、後期思想を唯物論への傾斜と考えて、彼の哲学の後退であるとみてきたが、私はそうではなく、「発展」であると考えている。この問題についての私の考えは、これまでも時々発表してきたが⁽¹⁾、近年、このフョイエルバッハの後期思想への変化の経緯・内容について、日本でも新たな研究もなされてきているように思う⁽²⁾。

私自身は、彼の後期思想のなかでもとくに「食の哲学」に注目してきた⁽³⁾。そして、彼の「食の哲学」の内容およびそれが「宗教批判」とどのように関係しているかなどについて、研究をしてきたが、最近では、彼の「食の哲学」の現代的意義について、「食」という広い座標のなかで再考している。この研究の一部を、2018年6月の『総合人間学会』第13回大会の一般研究発表で、以下のテーマで報告しようと思っている。

【現代日本の「食と宗教」についての人間学的考察—フョイエルバッハの「食の哲学」をてがかりに—】

ところで、この研究の過程で、最近、彼の「食」の哲学について注目される論文を読んだので、紹介したい。

◆関陽子：「食」の人間学的意味の探究—人間学的唯物論と構造人類学を手がかりに—『環境思想・教育研究』第10号、環境思想・教育研究会発行、2017、153-161頁

この論文は、日本ではほとんど論議がなされていない「食」に関する哲学的論文として、大変注目されるものだと思われるので、直接、講読をお勧めしたい。

関氏は、現代日本の「食」の状況を踏まえて、「食」の人間学的意味への追求が要請されているとの考えから、フョイエルバッハ（人間学的唯物論）、レヴィ・ストロース（構造人類学）、エーダー（エコロジー道徳）という、三人の「食」に関する考え方の人間学的意味および思想的意義を論究している。

だがここでは、関氏のフョイエルバッハの「食の哲学」への解釈に関して、私が思うことを少し述べたい。なお、この論文のなかで、フョイエルバッハについては主に以下の章でとりあげられているので、ここでもこれを中心に、私が気付いたことを少し述べたい。

「2 人間学的唯物論における「食」：(2-1)フョイエルバッハの食の哲学、(2-2)「疎外された食」へのまなざし—感性的主体と社会的主体の統合的人間観から」

関氏は、まず現代の食の思想的座標について、次のようにいう。現代社会に蔓延する「身体の欲望」の肥大化によって、諸個人が「不快や苦しみ」「痛み」をもっているにもかかわらず、その痛みや不足を避けてゆこうとする状況に追いやられている。そしてそうしたなかでの食のあり方も「他者感覚の麻痺した食」といえるような状況があり、「人間にとって食とは何か」、「食」についての「人間学的意味」が問われているという。そしてこの観点から、フョイエルバッハの人間学は注目され、彼の受苦的人間観、身体的存在の独自性について、次のように述べている。

(1) フォイエルバッハの「受苦的人間観」「感性的身体論」と「食」との関係

関氏によれば、フォイエルバッハは、人間身体の必然性や有限性を受苦性としてとらえ、人間の身体のあり方を「受苦することができる存在」ととらえた。しかしこの受苦的身体は受動的だけでなく能動的な主体でもあること、「受苦的主体性」をもつことに注目する。そのうえで、その考えは彼の「食」の哲学にも展開されていると考える。

フォイエルバッハの「食」の哲学によれば、「食べること」は受苦的身体の具体的側面であると同時に、感性的主体としての人間を指示するものである。そして彼の身体概念は、「食とは開放的活動的身体の自然との内的・外的な実践的な関わりを端的に示すもの」であり、同時に「主体の身体性をベースにした『客体』や『他者』への共生の原理として提唱され」ているとも指摘する。つまり身体は「食」を通して、「他者（自然を含む）との相互行為・他者世界の交流（性）」と「人間と自然との関係性」という人間の本質を語っているとみている。

関氏は、フォイエルバッハの「食」の哲学を感性的・受苦的身体から読み込んでいるのだが、問題点として、フォイエルバッハの哲学の年代史的な後付けがなされていないのが、研究の難点といえよう。

(2) 「食の疎外」ということへの注目

食（消費）と農（生産）は両者ともに身体的活動であるが、今日、市場原理の導入によって、食は商品の消費へ、農は商品の生産活動に置き換えられ、また食の世界は需要と供給に振り分けられ、両者は関係性よりも利潤を生むことを期待されるようになった。

そして人間の食活動する身体も市場の操作の対象となり、人間の食も感性も「剰余価値を生む労働力」と同様に「消費される可能性」を秘めていることから、「労働の疎外」と同様に「食の疎外」が引き起こっている。

この疎外の内容について、フォイエルバッハは、人間自身の類的本質の問題としたが、マルクスは社会的諸関係の総和としたことによって、「人間は個人的にだけでなく社会的に食べている」という観点や認識があたえられ、「食の疎外」の全体が把握できるようになった。そして「疎外された食の全体像は、フォイエルバッハ的な感性的主体とマルクス的な社会的主体との統合的な人間観からはじめて明らかになる」と述べている。

以上のことを踏まえたうえで、今日の「食の疎外」を乗り越えることについて、次のように述べている。

食が「感性的活動」でありつつ、「食べること」と「食べる〈もの〉・〈意味〉」とを共有する「共同的な活動」であるならば、「社会にとっての食」や「食の社会的意味」の次元が存在することは否定できない。しかし遺伝子組換え食品への反対運動、有機農業や産直運動、スローフード運動、「子ども食堂」にいたる食の変革運動は、社会的かつ感性的主体によって展開されてきた「食の実践」といえるのではないだろうか、と。

(3) フォイエルバッハの「自然主義」について

関氏は、山之内靖を引いて、フォイエルバッハの哲学の土台には「自然主義」があり、これはレヴィ＝ストロースの構造主義と相通じるものがある、という。しかしレヴィ＝ストロースの感性は、具体的な生活実践に裏付けられたものであり（彼の「食のタブー」論も感性に意味づけられた実践である）、「ヘーゲル流の歴史観とは異なる『空間的な場の差異に拠って相対化する視点』が示されている。それに対して、フォイエルバッハの感性は、受動的能動的な二重の关系的なあり方をもつ人間概念に依拠しているので、実践的活動にはとどいていない、と批判している。

ただ関氏のフォイエルバッハの自然主義についての見解にもまた、後期思想の特色を含めて、その後付けが必要である、と私は思っている。

環境思想の研究者である関氏は、この論文において、エーダの「食」における日常道徳を出発点とする「エコロジー的理性の再構成」「エコロジー的道徳」の構築に期待しているが、エコロジー思想や倫理の観点からのフォイエルバッハの「食の哲学」の読解の可能性を、私はこの論文から読みとれたように思っている。

(1) 『宗教批判と身体論—フョイエルバッハ中・後期思想の研究』御茶の水書房、2008

(2) 柴田隆行「フョイエルバッハの実践(1)～(6)」『季報唯物論研究』2014-2016

(3) 『いま、なぜ食の思想か—豊食・飽食・崩食の時代』社会評論社、2015。

「フョイエルバッハ後期思想の可能性—「身体」と「食」の構想」『ヘーゲル哲学研究』Vol.21、日本ヘーゲル学会編、こぶし書房、2015

ウルズラ・ライテマイヤー「誤認された思想家から現代的思想家へ。ドイツ語圏における 1965 年から 2015 年までのルートヴィヒ・フョイエルバッハ哲学の受容」(3)

柴田隆行訳

2. ハンス＝ユルク・ブラウン『L・フョイエルバッハの宗教哲学』(1972年) (22)

シュッフエンハウアーによる研究成果は、興味深いことに、検閲を考慮した宗教批判と言われるフョイエルバッハの宗教哲学研究から始まった。さしあたり形を整えつつあったシュッフエンハウアー版フョイエルバッハ全集とともに、——予測できなかったが——神学においても大きな関心と呼んだ。たしかにフョイエルバッハは良く知られてはいたが、それは 19 世紀のおそらく最も鋭い宗教批判家としてであり、それと対応して、キリスト教会からは無神論者として読まれ非難されそう烙印を押されていた。だがまた、フョイエルバッハは宗教哲学者として神学の内部に位置づけられ、その影響外に置かれることはなかったし、1970 年代の理解ある神学(gestandene Theologie)の観点ではスキヤンダルなどではまったくなかった。ブラウンはフョイエルバッハをヘーゲルの宗教哲学講義の観点で解釈した。ヘーゲルのこの講義で、当時のハイデルベルク大学神学生〔ブラウン〕は宗教を哲学の対象として論じようとの気持ちを強めた。〔ブラウンは以下のように述べる。〕ヘーゲルによってすでに『精神現象学』で準備されていた人間中心的キリスト論⁽²³⁾こそがまさに、人間となった神の宗教としてと同時に自己意識の最高段階として自らを知るものだとフョイエルバッハは確信していた。それゆえ、フョイエルバッハの宗教哲学は、事柄からして、ヘーゲルの講義と対立しないし、まさにそれ以上にプロテスタンティズムと対立することもない。むしろ、人間の自己意識に反映しているのは神的なものではなく、神の表象における人間であるとする点で、フョイエルバッハを動かす反転はヘーゲル宗教哲学の継承ないし急進化となった。宗教に関するフョイエルバッハの新たな宗教概念は(37 頁参照)、こうして「教会的キリスト教」(202 頁)の原則と対立する。〔以上のようにブラウンは述べる〕。だが、こうした推論は、端的にキリスト教と対立せず、したがって、人間となった神において受肉した人間性と対立することもない。この人間性は〔フョイエルバッハの〕我・汝関係にその最もぴったりの表現を獲得した。

ブラウンは、ルートヴィヒ・フョイエルバッハを正当にも宗教哲学者として、しかも批判的宗教哲学者として擁護する。このことが意味するのは、第一に、神学面で高校並みに語られる(verschult)キリスト教に対するフョイエルバッハの批判は、一神論やそれと結びついた無からの創造を宗教哲学的に分析することの一部として理解しなければならないということである。したがって、フョイエルバッハの宗教哲学を、あたかも宗教など存在しないかのような、たんなる宗教批判に還元することはゆるされないだろう。すなわち、フョイエルバッハは、宗教が哲学より以前にある、ないし、哲学の始源は宗教内にあるとする点で、ヘーゲルと一致する。依存感情としての宗教性(122～125 頁)は自然的人間的な感情⁽²⁴⁾であり、それは有限態の意識から、すなわちヘーゲル的に言えば自己意識から生じる。ところで、自己意識は他者として、したがってまた無限態として自らを設定することができる。このことから第二に、『キリスト教の本質』においてフョイエルバッハの宗教哲学的分析で同時に問題とされるのは、キリスト教信仰の年代的ではなく体系的に構成された歴史である。ヘーゲルの歴史哲学モデルが、(キリスト教的プロテスタント的)宗教や人倫態総体において自己意識が最高の発展段階をなすとは想定しないとしても(35 頁)、それにもかかわらず、弁証法的に上昇する歴史の発展段階に固執するという点で、それ〔フョイエルバッハによるキリスト教信仰の歴史〕はたしかにヘー

ゲルの歴史哲学モデルと区別される。「したがって」とフォイエルバッハは言う、「私の著作の歴史的諸前提と媒介段階を知らない者は、私の議論と思想の結節点が欠けている」(25)。それゆえ、ブラウンとともに続けるならば、ヘーゲルの宗教哲学研究とフォイエルバッハの宗教哲学研究との内的関連を明示し、それが現実に啓蒙の宗教哲学的主題のより大きな関連することにすべてが掛かっている。(ここでは序論で繰り返しカントの後継者としてのフォイエルバッハが参照されている(9～21頁))(26)。

「啓蒙的」なマルクス主義のパーспекティヴから見れば、フォイエルバッハのヘーゲルとの訣別を作り上げ、彼を史的唯物論の普及者として救出することにすべてが掛かっている(そうでなければ彼は否定的ブルジョア哲学の文書館で埃にまみれているだろう。)一方で、ブラウンにとっては——まったくヘーゲルの意味で——ヘーゲルとの訣別を切り換える訣別の連続性が問題とされた。すなわち、ヘーゲルとフォイエルバッハの間に具現される哲学的「最高点」のような訣別線は、同時に「登りであるがしばしば下り」でもあり、そのようなものとして、一回限りではなく、次の変革の前段階にほかならない(27)。

3. エーリヒ・ティース『哲学と現実。ルートヴィヒ・フォイエルバッハのヘーゲル批判』(1972年)(28)

ティースもフォイエルバッハのヘーゲル理解を弁証法的に、したがってヘーゲルによって完成された思弁的体系哲学との訣別として、またヘーゲル哲学の継承ないし実在化として解釈する。この論題の第一の典拠としてあげられるのは、フォイエルバッハが1928年〔1828年11月28日付の間違い〕に学位論文をヘーゲルに送り、理性の実現を求めた書簡であり、だがまた、ヘーゲルの最終講義のダーフィット・フリードリヒ・シュトラオスによる筆記である。後者ではヘーゲルは、現実的なものは理性的なものではあるが、現存するからと言ってすべてが現実的であるわけではない、と引用される(452頁)。すなわち、純粹観念論との訣別は、ヘーゲル自身によってすでに遂行されているか、あるいは、ベルリンの彼の聴講者たちによって少なくともそう理解されているかしている。

こうして見ると、フォイエルバッハが哲学的議論に持ち込んだ新しいものは消えるか、あるいはその認識論的かつ実践的な感性の新評価に還元される(460, 465頁)。ティースは、彼が序論で公式化した意図に反して、フォイエルバッハを救おうとしても、彼の教師〔ヘーゲル〕の反省水準に逆戻りさせた(438頁参照)(29)と証する人たちのグループに組み込まれる。レーヴィットとシュミットに反して、ティースはたしかにフォイエルバッハの「ヘーゲルのもとで訓練を受けた方法意識」を計算に入れるが(439頁)、それにもかかわらず学位論文の終わり辺りでの「新しい哲学」は、「論題、箴言、格言詩、諷刺詩」から先に進んでおらず、それらの「説明手段」が検証されていないと結論づけている。「この方法上概念的な反省を」と教条的に語られる、「代案として適用しようとするなら、ヘーゲル後のいかなる哲学も、引き受けなければならない」(482頁)と。この検証に、哲学実現というフォイエルバッハのプログラムは耐えられない、と〔ティースは〕言う。

ティースは論文で、新しい哲学についてのフォイエルバッハのプログラムを中心に据え、ヘーゲル書簡のプログラムと比較する。そのかぎりでは、フォイエルバッハをマルクス主義的な理解から守ろうとしたことは明らかである。それにふさわしい大きな空間が、1976年ティースによって編集された5巻本のフォイエルバッハ初期著作集で割り当てられている(30)。そこでフォイエルバッハはヘーゲル専門家として特徴づけられている。ところで、ヘーゲルの弟子や専門家からヘーゲル主義者に至る道がさらにあり、この道こそが——ティースによれば——概念的反省の方法に引き戻さないために本来のものとならなければならない道であるという。すなわち、ヘーゲル後のすべての哲学はポスト・ヘーゲル的である。いかなる新たな哲学も、かつてマルクスが火の河(Feuer-Bach)を渡ってきたように(31)、ヘーゲルを通して来るばかりではなく、ヘーゲルの概念的かつ方法的展開と比肩しうるものでなければならない。わかりにくく、無価値で、自己中心的で、最後に、イデオロギー的だと見なされる場合でも、そうである。このように見れば、フォイエルバッハは偉大な哲学のテーブルについていない。というのも、彼の意義は、彼の宗教批判と同様に、哲学的ではなく、政治的かつ社会的な性格を持つからである。フォイエルバッハをヘーゲルの後継の(宗教)哲学者として回復したのがブラウンだと

すると、ティースはこの哲学的なものをフョイエルバッハから再び引き離し、フョイエルバッハを、方法的にも概念批判的にも自ら反省することのない明確ならざる論題に還元する。

脚註

- 22 Hans-Jürg Braun, *Die Religionsphilosophie Ludwig Feuerbachs. Kritik und Annahme des Religiösen*, Stuttgart-Bad Cannstadt 1972. [桑山政道訳、新地書房、1988年]
- 23 Georg Wilhelm Friedrich Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Theorie-Werkausgabe Bd.3, hg. v. Eva Moldenhauer u. Karl Markus Michel, Frankfurt 1975, 494, 552.
- 24 自然的人間的依存感情という表現での宗教性の解釈で、フョイエルバッハは、否認するとしても、まったく明らかに、ブラウンが浮き彫りにしたシュライエルマッハーの「全面依存 schlechthinnige Abhängigkeit」概念を肯定している。ブラウン『フョイエルバッハの宗教哲学』124頁参照。さらに Macjei Potepa, "Feuerbach und Schleiermacher", in: Braun (Hg.), *Feuerbach und die Philosophie der Zukunft*, 165-167, 173ff.参照。
- 25 Ludwig Feuerbach, *Vorwort zur zweiten Auflage des Wesens des Christentums*, GW 5, 24.
- 26 この考えをブラウンは繰り返し取りあげる。とくに彼によって編集された *Feuerbach und die Fortsetzung der Aufklärung* を参照せよ。
- 27 ヘーゲルに由来するこの歴史過程の弁証法的理解は、私が体系化し歴史的哲学的に仕上げた。Ursula Reitemeyer, *Umbruch in Permanenz. Eine Theorie der Moderne zwischen Junghegelianismus und Frankfurter Schule*, Münster 2007.
- 28 Erich Theis, "Philosophie und Wirklichkeit. Die Hegelkritik Ludwig Feuerbachs", in: ders. (Hg.), *Ludwig Feuerbach*, 431-482.
- 29 ヘーゲル主義的解釈様式の一面性については Ursula Reitemeyer, *Philosophie der Leiblichkeit. Ludwig Feuerbachs Entwurf einer Philosophie der Zukunft*, Frankfurt a.M. 1988, 131 を参照せよ。
- 30 Ludwig Feuerbach, *Werke in sechs Bänden*. これが完成しなかったとしてもその功績とともに、アスケリと共同で〔フョイエルバッハの〕エアランゲン大学講義の新たな公刊を準備したこと、ティースはとりわけ1976年に学術図書協会から出た研究叢書に貢献した (Thies (Hg.), *Ludwig Feuerbach*)。ここでティースは、ルートヴィヒ・フョイエルバッハに関するバルト(1927年)、レーヴィット(1928年/1966年)、ブロッホ(1953年)による重要な寄与と、1970年代の同時代のフョイエルバッハ受容(シュミット、コーディング、ロールモーザー等)とを対比させている。
- 31 Karl Marx, "Luther als Schiedsrichter zwischen Strauß und Feuerbach (1824/43)". MEW 1, 26-27.ここに、「諸君、諸君ら思弁神学者と哲学者に忠告する。従来の思弁哲学の概念と偏見から自由になれ。諸君があるがままの事物に、すなわち真理に向かいたいと思うなら。そして、諸君にとって真理と自由に向かう道は火の河(Feuer-Bach)を通る道以外にはない。フョイエルバッハは現代の煉獄である。」と書かれている。

(つづく)

書誌情報

川本 隆「初期フョイエルバッハのルター論——宗教的人間の「発生的 - 批判的」解釈に寄せて」2018年2月、『桜文論叢』第96号(pp.521-542)

著者コメント「昨年、執筆いたしました拙論「初期フョイエルバッハのルター論」……この論は、私が非常勤で勤めております日本大学法学部の桜文論叢第96巻長沼宗昭教授古稀記念論文集への投稿の依頼を受けて執筆させていただき、掲載に至ったものです。拙著『初期フョイエルバッハの理性と神秘』知泉書館、2017年の補完となる論です。博論執筆段階では予想レベルにすぎなかった仮説を「フョイエルバッハ30年代のルター論」にも適用できることを実証したつもりです。うまくいっているかどうかは、定かではありませんが……。」

新編集本刊行の提案

石塚正英

みなさまご存知の通り、創立以来、もっとも熱心な研究者の一人であります川本隆さんが昨年オリジナル本を刊行されました。これで、主だった創立メンバーは各自のフョイエルバッハ論を纏めたことになるのではないのでしょうか。私の手元にある文献を見ると、以下の通りです。

- 1991年石塚正英『フェティシズムの思想圏 — ドブロス・フョイエルバッハ・マルクス』
- 1997年河上睦子『フョイエルバッハと現代』
- 2008年河上睦子『宗教批判と身体論 —— フョイエルバッハ中・後期思想の研究』
- 2014-16年柴田隆行「フョイエルバッハの実践」シリーズ
- 2014年石塚正英『フェティシズム — 通奏低音』
- 2015年服部健二『四人のカールとフョイエルバッハ』
- 2017年川本 隆『初期フョイエルバッハの理性と神秘』

この際、一つの区切りとして、上記の活動を前提とする討論会を目指すのはどうでしょうか。概要を申しますと、主要メンバーの著作・論文をみずからまとめるだけでなく、それらを face to face で相互に論評し合う機会をつくり、結果を活字にして残すことです。

①フョイエルバッハの会で研究活動を行ってきた方々から希望者を募って「私のフョイエルバッハ研究まとめ」（仮）を 4000~8000 字程度で提出して戴く（5 月末まで）。少なくとも、ここまでは服部さんにも参加して頂きたい。

②「まとめ」集を PDF で作成し、参加者と希望者にメール送信する（6 月末）。

③それを資料としてフョイエルバッハの会内外の希望者による座談会を行う（夏休み）。

④それを文章化し、「まとめ」および数々の媒体に公表された新刊紹介・書評を加えて、出版（市販）する（2019 年末~2020 年春）。

⑤欲を言うと、「フョイエルバッハ研究の工具箱」という最新研究の引き出しみたいなミニ辞典を同時並行して編集し、付録に付けたい。

以上です。ご一考のうえ、ご返報戴けますよう、どうぞよろしくお願い致します。

上記、石塚さんの企画案に賛同し執筆を希望する方（あるいはご意見のある方）は、川本のメールアドレス t-kawa@toyo.jp 宛て 4 月末日までにご意向をお伝えください。なお、概略原稿提出締切は上述の通り 5 月末日です。

事務局から

*本紙は季刊発行です（次号 6 月）。ぜひ情報やお便り等をお寄せ下さい。字数自由。但し、長文の場合、編集上の都合で分載とさせていただくことがあります。

*年会費 500 円。郵便振替 00160-1-84468 「フョイエルバッハの会」。

〈事務局連絡先〉

112-8606 文京区白山 5 丁目 28-20
東洋大学社会学部柴田研究室気付
フョイエルバッハの会
tamast@toyo.jp
<http://www2.toyo.ac.jp/~stein/fb.html>